

「危機対応実践力養成プログラム」最終評価報告

地域連携支援委員会 委員長名 金 千秋

評価年月日 平成 23 年 3 月 31 日

平成 21 年度文部科学省 大学教育・学生支援推進授業【テーマ A】
大学教育推進プログラム「危機対応実践力養成プログラム～震災を教材にした
協働型専門職業人の養成～」の取組を以下のように評価する。

評価すべき点

- ・座学だけでは実践で使える学びを得ることができないので、フィールドワークは大変意義がある
- ・防災に対する学びや啓発について授業を通して行えたことは評価できる
- ・実践や発表の場が多い取組であった
- ・「長田と震災Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の積み上げ方式は評価できる
- ・本取組で学んだ危機対応実践力を将来の業務（歯科衛生・保育）の現場でも活かすことができるようになってほしい
- ・成果物（防災教材）が実現できたことが評価できるが、今後の実際の伝え方、見せ方の良い実践を期待する
- ・授業を受けるに従って自己効力感が下がることは、東日本大震災の事例を鑑みても理解できる

＊ ＊ 委員会全体として実践的な取り組みを授業として行ったことが評価された。つまり主体的に参加する学生のみへの啓発ではなく、授業が気づきの場の提供となった。それは学生全体への知見の蓄積であり、直ちに効果があがるというより、未来を見据えた人材育成としての取り組みとして評価できる。

改善すべき点

- ・内部評価についての指標や内容が分かりにくい。表現が難解である
- ・せつかくの活動であればもっと地域に告知してほしい
- ・防災教育についての客観評価は非常に難しい
- ・アカデミックな部分については一定の達成をみたが、実践力についての学びはまだまだである

**これらの取り組みは広く広報すべきである。地域でその取り組みが理解されれば、その実践の場の提案を受けることともなつたと考えられるが、学内のみで終始したことは残念だ。現場での実践を重ねてゆくことが実践力となつてゆくことは予想される。今後は大学間での連携や地域との連携の中で広報という視点も入れてゆくことが求められる。

取組の今後に期待すべき点

- ・本取組を踏まえ、将来、地域の要援護者のケアを行政と大学で考えていけないか
- ・フィールドワーク（岩手）での活動は継続すべきである。大学として一つの地域に関わり続けることは重要
- ・学生に機会を与える「場」を作り続けることが重要である
- ・将来、本取組を踏まえ、地域とボランティアセンターとの連携をどうしていくべきなのか考えるべきである
- ・将来的には、①災害時の避難所となるべく資材の備蓄や地域の資材・機材保有マップの作成、②大学として地域の安全化への貢献、③自らを守る人材育成教育の実施、をそれぞれ検討へ

**この取り組みを基盤として、上記の改善点で提案された地域とのネットワーク、また岩手の大学との連携などを、開発、継続することが期待される。特に地域との連携では、日常的ないわゆる顔と顔を合わせる機会＝場をもった広報が必要であろう。その場からの広報が、本大学が蓄積してきたもの、成果物などを地域の人々が「実感」を持って知ることになる。その結果、それらを実践的に必要とする地域からの要請が生まれてくると考える。

上記の出会いの場＝交流＝要請＝実践を繰り返すことで、地域力を盛り上げていく知識と人材とを併せ持った地域貢献大学としての認識となると考える。